



大沢文夫 Fumio Oosawa

愛知工業大学 客員教授

1944 □ □	東京大学理学部物理学科 卒業
1944-1950 □	名古屋大学理学部 助手
1950-1959 □□	名古屋大学理学部 助教授
1959-1986 □□	名古屋大学理学部 教授
1968-1986 □	大阪大学基礎工学部 教授併任
1973 □□ □	大阪大学基礎工学部 教授
□ □ □	名古屋大学理学部 教授併任
1986-□ □	大阪大学、名古屋大学 名誉教授
1987-1995 □□	愛知工業大学 教授
1995-□ □	愛知工業大学 客員教授
1995-□ □	日本学士院会員

オーガナイザー 根岸瑠美(東京工業大学大学院生命理工学研究科)

「日本の生物物理は親学会よりも若手の方が先にあったんだからねっ！」

若手の会に参加してくれた後輩に対して、私がよくする発言です。次ページの大沢先生の文章にも、日本生物物理学会発足が1960年12月、第1回若手夏の学校が1960年夏、とありますから、斟酌した私の発言も間違いではなかったのでしょうか。第1回夏学の校長は当時名大・K研の大学院生でいらした池上明先生だったとのこと。当時のことは大沢先生がお話しされることと思いますので、現場に居合わせなかった私が記述するのはこのくらいにしておきます。

偶然ではありますが、第50回という記念の回を名古屋（中部支部）で開催することができました。校長は名大・TB研の都築峰幸くんです。「せっかくの第50回なので、歴史を扱ったセッションを組み込みたい」という彼の提案から、今回のオープニングが企画されました。このセッションには「これまでの50年を振り返る」だけでなく「生物物理のこれからの50年を参加者全員で考えたい」という想いが込められています。また、参加者全員によるフラッシュトークや、若手セッションなど、夏学全体を通して都築くんの「若手」へのこだわりも見受けられます。専門分野や年齢に関わらず「若手」が自由に議論でき、生物物理学を肴に大いに盛り上げられるような場所にしたい！このような想いで都築校長をはじめスタッフ一同、準備を重ねてきました。

大沢先生たちがご活躍された「夏の学校の始まりのころ」に誰も想像できなかったような進化を目指して、「これからの50年」私たち若手研究者は生物物理学にどのような貢献ができるのでしょうか？

若手夏の学校の始まりとその前後

大沢文夫
愛知工業大学

若手生物物理夏の学校第1回は1960年夏、志賀高原で開かれた。同じ年の12月に生物物理学会がスタートしたからそれに先立っての若手の学校の開催であった。新しい学問分野に新しい学会を作るには、若手のもり上がりの方が何よりも大切であると思われた。ひるは若手の研究発表、よるは若手、古手入りまじってのどういう学会を作るかの議論が白熱した。その後、毎年夏の学校が開かれている。はじめは若手同士の研究発表と討論が主であった。各地の若手グループにそれぞれ宿題を出しておくこともあった。先生を招いて講義やセミナーをとすることはあまりなかったと思う。現在はずいぶん学校のスタイルが変わったようである。

われわれは1950年に20代のメンバーばかりで名大物理K研として活動し始めた。コロイド物理から高分子物理、そして対象を生物現象へ、特に生物運動、筋肉収縮の分子論へ移すことにして準備にかかり、1954年に筋肉蛋白質アクチンの研究を開始した。このころの状況を"この指とまれ"という形で若手の研究グループが生まれ、テーマが決まったと表現した人がある。当たっているかもしれない。いまでも全国各地でこういう感じで若手グループが生まれているだろうか。よくわからないが、戦争が終わってまもなくのあのころは上にいる"先生"たちが少なくていい時代だったという人は多い。

しかるべき設備、装置も低温室も超遠心機もないままアクチンのG-F変換の研究を始めて、アクチンの抽出精製から各種測定をやみくもにつづけた。めどがついたのは2年後、フルペーパーが出たのは5年後であった。そこでG-F変換を"状態論"として明確に記述することができた。動的平衡、相転移、ゆきき、サイクルなどのことばがでてくる。実験の途中、まわりには、まるで生物学、生化学のようでどこに物理があるのかなどという声もあった。われわれは何も気にしなかった。でき上がったのはいかにも"物理的"考え方がしみこんだものであった。国内外の研究者達にはとても新鮮に映ったようである。

以上思い出のいろいろ。若手のみなさんに期待をこめて。